

在唐新羅人社会の一瞥
― 『入唐求法巡礼行記』 開成四年四月二六日条を読んで ―

王 海燕

入唐僧円仁の『入唐求法巡礼行記』（以下、『巡礼行記』と略称）は、私が最初に出会った日本人の日記であり、一九九八年四月から二〇〇四年三月にかけて、國學院大學院生の時代に指導教授の鈴木靖民先生のゼミで一貫して研究対象としていた。大学院修了後、仕事の諸事情でしばらく『巡礼行記』を離れたが、二〇〇六年から二〇一四年まで殆ど毎年末に、中国側の協力者として國學院大學研究チームとともに、『巡礼行記』に基づいて、円仁の足跡を辿っており、また今年、二〇一八年五月に日文研に来てから、友人の神戸大学・古市晃先生のゼミに参加し、改めて勉強する気持ちで『巡礼行記』を読むことになった。そして、開成四年四月二六日条の記事を読んだ時に、今まであまり気に留めてこなかった「騎馬乗驢」「娘子」などの言葉に興味を湧いてきたのである。

周知のように、円仁は承和遣唐使の船に乗り、二度の失敗を経験し、ようやくにして荒波を渡って、承和五年（唐・開成三年、八三八）七月に唐土に到着した。しかし、天台山行きの許可をなかなか取れず、日本に空しく帰国することとなった開成四年（八三九）三月、円仁は求法の志を遂げるため唐に留まるという意思を固めたのである。遣唐大使藤原常嗣の承諾を得たうえで、四月五日、円仁と弟子の惟正・惟曉および水手（かこ）の丁雄満の四人は遣唐使一行

と別れ、海州東海東海山の東辺の沿岸に上陸し、密州を経て天台山に行くことを図ったが、日本人であることを当地の人に見破られてしまう。そして、東海県の県長官さらに海州の州長官と会見した際にも自分の気持ちを伝えることは叶わず、最終的には四月一〇日、偶然にも東海県の沿岸に停泊していた帰国途中の承和遣唐使船の第二船に乗せられ、日本への帰途に着くこととなったのである。

その後、第二船の航海は最初に東海県から東を目指したが、風向によって山東半島に向かい、登州管内の海岸に漂着し、四月二六日午前に乳山西浦に停泊した。乳山は現在山東省威海市管轄下の乳山市に位置し、文字通り乳房のような形をした山であり、『巡礼行記』にも「乳山の体は峻峰、高穎にして、頂上は鋒のごとく、山根は嶺より下って六方を指す（乳山之体、峻峰高穎、頂上如鋒、山根自嶺下而指六方）」と語られている。(註二)清・李誠『萬山綱目』巻一一に乳山が「乳山口の南、海を隔てる（乳山口南、隔海）」「乳山口海中に乳山あり（乳山口海中に乳山）」とあるように、乳山の北側の乳山口と呼ばれる海湾は海水の入り込みによって山間窪地に形成された良港であり、現在、V字状の湾内の水域面積が約四六平方キロ、海湾の入口は乳山の西側に位置し、南向きで幅が約〇・七五キロとなっている。(註三)『巡礼行記』には、乳山西浦のほかに乳山浦・乳山泊口・乳山泊・乳山浦などの表記もあるが、すべて乳山を標示し、乳山口あたりの港や入り江を指すと思われる。

唐代において、乳山口は登州の海の玄関口の一つであり、揚州・楚州から新羅や渤海への船が頻繁に寄港して順風を待つ港であった。例えば、開成五年（八四〇）二月、新羅の清海鎮の張宝高（張保臯）の部下である崔暈の船は揚州から出発して乳山浦に停泊し、新羅の西海岸を目指したという。(註三)また、科挙に合格して唐の官僚となった有名な新羅人の崔致遠は新羅へ帰国

するため、中和四年（八八四）一〇月に揚州から船に乗って出発したが、帰路の途中、その船も乳山に寄って順風を待っていた。^{（註四）}

『巡礼行記』開成四年四月二六日条によれば、円仁らが乳山西浦に着いたその日（四月二六日）の午後に、新羅人三〇人余りが馬あるいは驢馬に乗って円仁らのところに来て、「押衙が潮の落ちなば来たりて相看んと擬す。所以に先に来たりて候迎す（押衙潮落擬来相看、所以先来候迎）」と話しかけた。やがて、「押衙は新羅船に乗りて来たる。船を降りて岸に登るに、多く娘子あり（押衙駕新羅船来。下船登岸、多有娘子）」とある。ここに現れた押衙はその名前が明記されていないが、「新羅通事・押衙」「登州諸軍事押衙」「勾当新羅使」などの肩書を持っている新羅人の張詠であると推定されている。^{（註五）}張詠の役目は登州文登県の新羅人戸を管理することである。^{（註六）}ただし、円仁は乳山浦が登州牟平県の南界と記したことから、当時の乳山辺りは文登県に隣接しているかもしれないが、牟平県管内であった。^{（註七）}よって、乳山西浦に来た押衙は別人であった可能性がないわけではないが、もしその押衙が張詠であれば、彼は文登県のみならず、牟平県の南部沿岸の港や新羅船の監督にも携わり、そこで行政的県を超えて乳山辺りの在唐新羅人の社会とも繋がっていたことが示唆される。

ところで、押衙を迎えたシーンに登場した他の人々に目を移したい。まず、馬や驢馬に乗って来た新羅人たちを取り上げよう。

唐代においては、皇帝から庶民までの幅広い階層で馬に騎乗して出かけることが珍しくないが、乗り物が人の身分を表すものとされたため、騎馬に関する規定がしばしば出された。例えば、乾封二年（六六七）に職人・商人の乗馬を禁止^{（註八）}、貞元年間（七八五〜八〇五）に仕官でなければ大きな馬に乗ってはいけないと命じた。^{（註九）}しかし、禁令にもかかわらず、晩唐になると商

人の乗馬は盛んになつた。(註一〇)馬の飼育には金がかかるため、社会的地位の低い商人たちは騎馬行為によって富裕層に属することを誇示したのではないかと思われる。

一方で、驢馬は馬に比べるとどうであったのか。唐代の牛僧孺の『玄怪録』と李復言の『続玄怪録』の両方に収められた伝奇小説「杜子春」に、主人公の杜子春は金持ちから貧乏人へ転落していくにつれて、乗り物も貴賤の順で馬から驢馬、さらに徒歩に変わったとある。また、有名な詩人杜甫は「奉贈韋左丞丈二十二韻」の詩に「騎驢三十載、旅食京華春、朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、殘杯與冷炙、到死潛悲辛」と書き、「馬」を富に、「驢」を貧に喩え、自分が仕官になれず、貧しい生活を送り、三〇年（一三年の説もあり）にわたって驢馬に乗っていたことを感嘆した。要するに、驢馬は馬より安い家畜で、地位の低下や経済的な貧しさを表す乗り物とされ、主に庶民に利用されていたのである。

従って、前述の新羅人三〇人余りは全員在唐新羅人であるが、乗り物からみると、異なる階層の人々によって構成されていたと推定できる。この点は、彼らの中の一人が円仁により「百姓」と記されていたことでも裏付けられる。ちなみに、その「百姓」は他の入り江で新羅船九隻からなる承和遣唐使の帰国船団を目撃したという情報を円仁らに伝えたという。そこで、彼らは交易や運搬に関係する新羅人たちと考えられる。

次に、押衙が上陸した際に、多くの「娘子」がいたことにも注目したい。この「娘子」の意味については、現在二説が併存し、一説は遊女(註一一)、もう一説は妻または婦人の意味するとして(註一二)いる。そもそも、中国の文献においては、「娘子」という言葉は接尾辞を有する名詞として、唐初に成立した『北齊書』祖珽伝に初見する。これは祖珽から、色事の相手の王氏未亡人（寡婦）に対しての呼称であり、美称的な表現であろう。また、楊貴妃も皇帝・玄宗の寵愛を得

て、皇后同様の礼儀や待遇を受け、宮中で「娘子」と呼ばれたとある^(註三)。楊貴妃の「娘子」は寵姫の証しでありながら、皇后同然の処遇によって女主の意味も含まれるのではないか。そして、正史のみならず、唐代の文学作品においても、「娘子」の称谓がしばしばみえる。例えば、文人の著わした小説の中で教坊の宮妓的妓（伎）女も、教養を持つ遊女的仙人も「娘子」と呼ばれるし^(註四)、民間文学としての敦煌変文の中で妻も主人に「娘子」と称されている^(註五)。従って、「娘子」という用語は唐代において、民衆までの広い階層に普及し、多義的な呼び名であり、場合によって具体的な意味の異なることが分かる。

それでは、円仁の記した「娘子」たちとはいかなる意味を持っていたのであろうか。『巡礼行記』においては、女性を表現する言葉として「女弟子」「女」「女人」「女道士」「家婦」「妻」「婦人」などがあるが、「娘子」は開成四年四月二六日条のほかに例がない。すなわち、円仁は明らかに「娘子」を「妻」「婦人」と区別して日記に書き込んだのである。もちろん、単なる妻あるいは婦人の意味として「娘子」という言葉を使った可能性がないわけではないが、「娘子」たちは港で前述の新羅人たちの押衙を迎えた場面に現れたことから、押衙を歓迎するセレモニーの一環として働いていたのではなからうか。そうであれば、「娘子」たちはなぜこの場で必要とされたのであろうか。多くの先行研究は、在唐新羅人は人的ネットワークを利用して、唐の国内交易および海上交易で活躍していたと指摘している。したがって、乳山周辺に在住する在唐新羅人は、各階層の人と「娘子」を動員して押衙を迎えることで、押衙の面子を立てて満足させ、押衙との人的ネットワークを維持しようとしたと推測されるのである。そこに、「娘子」たちは場を盛り上げ、押衙を喜ばせる役割を与えられ、この意味で妓女・遊女に近い性格を持った者たちであると推想できる。

ちなみに、押衙の到着・帰宅時間について気になる点がある。『巡礼行記』によれば、この日（二六日）、押衙は未時に到着し、晩頭に帰ったという。未時は大体一三時～一五時の間であるが、晩頭は曖昧な時間である。唐代において、人々の正式な食事は毎日朝・晩の二膳しかなく、その中で晩食は大体哺時（申時、一六時）以後に行なわれる^{（註六）}。よって、もしかすると、新羅人は宴会を開いて押衙をもてなし、「娘子」たちもその宴会を盛り上げたかもしれないと想像する。

以上、『巡礼行記』開成四年四月二六日条を読んで在唐新羅人の人間関係作りの一様相を思考してみた。円仁の唐滞在と日本への帰国の過程で、在唐新羅人が果たした役割の大きさは計り知れない。それ故に『巡礼行記』の中では在唐新羅人に関する記録が多く、後世に多くの考究材料を与え、そこから在唐新羅人社会の諸相が窺われるのである。

円仁は乳山に着いた数日後、再び唐に滞留できるように動き始めた。同年（八三九）六月に、在唐新羅人の協力によって、ようやく登州赤山法花院に留まることができた。大中元年（八四七）七月二〇日に、会昌の廃仏を経験した円仁は、乳山の長淮浦に着き、日本に向かう新羅人の船に乗ることができた。その船は九月二日に登州の赤山浦から日本へ出発し、円仁の在唐九年間の旅が終わったのである。

註

- 一 『巡礼行記』開成四年四月二六日条。
- 二 山東省乳山市地方史志編纂委員会編『乳山市志』第二編・自然環境・海域・海湾、齊魯書社、一九九八年。
- 三 『巡礼行記』開成五年二月一五日条。山崎雅稔「唐における新羅人居留地と交易」、『國學院大

- 學紀要』第五三卷、二〇一五年。
- 四 崔致遠『桂苑筆耕集』卷二〇・上太尉別紙五首(四)。
- 五 金文経「在唐新羅人社会と仏教―入唐求法巡礼行記を中心にして―」、『アジア遊学』第二六号、二〇〇一年四月。
- 六 『巡礼行記』会昌五年八月二十七日条。
- 七 『巡礼行記』会昌七年閏三月一〇日条。
- 八 『唐会要』卷三一・輿服上・雜錄。
- 九 唐・佚名『大唐傳載』。
- 一〇 『唐会要』卷三一・輿服上・雜錄。
- 一一 今西龍「慈覺大師入唐求法巡礼行記を読みみて」(『新羅史研究』所収、国書刊行会、一九七〇年、初出一九二七年)。
- 一二 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第二卷・開成四年四月二十六日条註五、法藏館、一九八九年(復刻版)。
- 一三 『旧唐書』楊貴妃伝。
- 一四 崔令欽『教坊記』、張鷟『遊仙窟』など。
- 一五 「難陀出家縁起」「舜子変」「秋胡変文」など(潘重規編『敦煌変文新書』、文津出版社、一九九四年)。
- 一六 中村喬「早食と點心」、『立命館文学』第五六三号、二〇〇〇年二月。

(浙江大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員)